

## 伝統的な言語文化を大切に

# ふれる・楽しむ・親しむ「古典」

## 学年のはじめに

- 「日本人の心、また日本の文化として受け継がれてきた言葉を大切に」という方針のもと、学年はじめの学習は、文化の中の言葉と向き合う単元としました。
- 小学校での「伝統的な言語文化」の学習とのスムーズな接続を大切にしました。

## 学年のはじめは「伝統的な言語文化」単元

言語文化にふれる  
声に出して、さまざまな作品を読もう。

### 春のうた

かえるは冬のあいだは土の中において春になると地上に出てきます。  
そのはじめての日のうた。

ほっ まぶしいな。  
ほっ うれしいな。

みずは つるつる。

かぜは そよそよ。

ケルルン クツク。

ああいにおいだ。

ケルルン クツク。

草野心平

声に出して、詩を読もう 14

### 朧月夜

菜の花島に 入日薄れ、  
見たす山の端 霞ふかし。

高野辰之

一年生では、小学校でもなじみの深い「春のうた」「朧月夜」からはじめます。中学校での学習は、声に出して体を使い、楽しみながらスタートできるよう配慮しました。

## 別冊・資料編『学びを広げる』

学習指導要領で重視された音読・暗唱を受けて、本冊以外にもさまざまな作品を集めました。授業の内容に応じて、柔軟に活用できます。

一年別冊折込「小倉百人一首」全音

### 小倉百人一首

◎は「万葉和歌集」  
◎は「古今和歌集」が  
出典であること示す。

1 秋の田の原の庵のきをあらみ  
わが衣手は露にぬれつつ  
天智天皇◎

2 春すぎて夏来にけらし白妙の  
衣ほすてふ天の香具山◎  
持統天皇◎

3 あしびきの山鳥の尾のしだり尾の  
ながながし夜をひとりかも寝む  
柿本人麿◎

13 筑波の峰より落つる男女川  
恋ぞつもりて淵となりぬる  
陽成院◎

14 陸奥のしのぶもちずり誰ゆゑに  
乱れそめにしわれならなくに  
河原左大臣◎

15 君がため春の野に出て若菜つむ  
わが衣手に雪は降りつつ  
光孝天皇◎

二年別冊折込「古典の冒頭二十五選」

### 1 古事記

田安万倍が言す。夫、混元既  
に凝りて、氣・象未だ効れず。名  
も無く為も無ければ、誰か其の形

### 3 竹取物語

今は昔、竹取の翁といふ

和歌・俳句・漢詩・漢文など、さまざまな作品を掲載しました。全作品に現代語訳を併記し、内容が理解しやすいよう工夫しています。

**春の海 ひねもすのたり のたかな**  
（のたかな）春の海は一日中のたりのたりと寄せては返していることだ。  
 与謝蕪村

**行く春や 鳥啼き魚の目はなみだ**  
行く春を惜しんで、鳥は悲しげに啼き、魚の目は涙にうるんでいる。  
 松尾芭蕉

**めでたさも ちう位なり おらが春**  
特に立派なことなく、まあまあめでたい、あるがままの春の色だ。  
 小林一茶

**春過ぎて 夏来たるらし 白たへの衣千したり 天の香具山**  
春が過ぎて夏が来たらしい。真っ白な衣を千しているよ、天の香具山。  
 持統天皇

**人はいさ 心も知らず ふるざとは 花ぞ昔の香にほひける**  
人の心（のせ）は、さあ、どうなのかわからない。（てし）古くからなんだこの地では、（梅）の花が昔のままの香りで吹いてくることよ。  
 紀貫之

小中の接続を  
意識した冒頭単元

一年本編「声に出して、さまざまな作品を読もう」

「伝統的な言語文化」  
単元の教材

- 1年 言語文化にふれる  
「声に出して、  
さまざまな作品を読もう」  
「竹取物語」
- 2年 言語文化を楽しむ  
「枕草子・徒然草」  
「漢詩の世界」
- 3年 言語文化に親しむ  
「おくのほそ道」  
「中国の古典の言葉」

古典の冒頭二十五選

**8 枕草子**  
 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。  
 夏は夜、月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。  
 秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝所へ行くこと、三つ四つ、二つ三つなど飛び過ぐさへあはれなり。まいてかりなどの遊ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。  
 冬は、氷てきて、風うちまじりて、

**9 源氏物語**  
 いづれの御時にか、更衣あまたさくらひた中に、いとやむごとなふらぬが、すぐれて時ふありけり。はしめよ、思ひあがりたまへる。御めざましものにおどろみたまふ。  
 （一）

**2 万葉集**  
 海潮（うみうしほ）を宮（みや）に天（あま）の下（した）治（し）めたまひし天皇（てんおう）の代（よ）に、大海（おほい）無（な）常（じょう）天（てん）皇（わう）の御（み）歌（うた）。  
 龍（りゅう）もよみも持ち、この岡（おか）に、菜（さい）摘（と）みまふし、家（いへ）告（つ）げさせ、名（な）告（つ）げさせぬ。さらみつ、大和（やまと）の国（くに）は、わしなべて、我（われ）こそ告（つ）げしきなべて、我（われ）こそいませ、我（われ）こそば、告（つ）げらぬ家（いへ）をも名（な）をも。

**4 伊勢物語**  
 むかし、男（おとこ）、初冠（はつかん）良（よ）の京（みやこ）春日（かすか）の里（さと）に、狩（か）り、狩（か）りにいけり、いとなまめいたるらすみけり。この男（おとこ）かけり、思（おも）ほえず、ふるはしたくなくありけり。まどひにけり。

を知らむ。然（しか）れども、乾坤（けんこん）初めて分（わか）れて、参（ま）はらの神（かみ）造化（くわあ）の首（うぶ）と作（つく）れり。陰陽（いんやう）斯（こゝろ）に開（ひら）けて、二（ふた）はしらの堂（どう）群（ぐん）の品（しん）と為（な）れり。

りけり、野山（のやま）にまじりて竹（たけ）りつ、よづつのことに使（つか）り。名（な）をば、さめき、造（ぞう）と、いひける。